

会 議 録

☐全部記録 ☒要点記録

1 会議名	第4回姫路市教育振興基本計画審議会
2 開催日時	令和6年10月8日(火曜日) 14時00分～15時30分
3 開催場所	姫路市総合福祉会館 第1会議室
4 出席者	(出席者)姫路市教育振興基本計画審議会委員13名 (事務局)教育長、教育次長(2名)、教育総務部長、教育企画室長、学校教育部長、総合教育センター所長兼育成支援課長、生涯学習部長、城内図書館長、教育企画室主幹(2名)、学校施設課長、教職員課長、学校指導課長、健康教育課長、人権教育課長、教育研修課長、生涯学習課長、文化財課長、姫路科学館長、城郭研究室長、埋蔵文化財センター館長
5 傍聴の可否及び傍聴人数	傍聴可、傍聴人なし
6 次第	1 開 会 2 挨 拶 3 議 事 第3期 姫路市教育振興基本計画(素案)について 4 連絡事項 5 閉 会

7 会議の要点内容

以下のとおり

事務局	1 開会 第4回姫路市教育振興基本計画審議会を開会する。
教育長	2 挨拶 これまで第1回審議会から第3回審議会において、第2期計画の検証、こどもアンケート、基本理念及び目指す人間像、計画体系図、そして次期教育振興基本計画における施策・事業・指標について、各委員からご意見を頂いた。頂いた意見を踏まえながら、今後5年間を見据えた、より実効性のある計画となるよう事務局内で検討を重ねた。 第4回審議会となる今回は、第3期 姫路市教育振興基本計画（素案）について審議いただく。それぞれの立場からの知見を基に、活発な審議をお願いしたい。
会長	(第3回会議録の確認) 前回の会議録を確認する。 委員の皆様には、事前に第3回審議会の会議録(案)をお送りしているが、これについて修正等、何か意見はあるか。 (異議なし) 会議録として決定する。
事務局	3 議事 「議事 第3期 姫路市教育振興基本計画（素案）について」事務局から説明をお願いする。
委員	【第1章、第2章、第3章】を説明 第2期計画が「である調」だったのが「です、ます調」になり、フォントも柔らかい感じになり読みやすく見やすくなった。28頁、29頁について、「等」と表記している箇所と「など」と表記している箇所がある。平仮名「など」の方が読みやすいと思う。

	28 頁、「教育とは『人格の完成』『平和で民主的な社会の形成者の育成』とあるが、第 2 期計画には、「国家及び社会」といった表現があったと思うが、議論を重ねながら、どのような経緯で「国家」が削除になったのか。自治体が出す計画としては「国家」という表現は削除した方が望ましいと考える。削除になった理由を聞きたい。
事務局	「人格の完成」と「平和で民主的な社会の形成者の育成」の箇所であるが、原文は教育基本法の第 1 条である。教育基本法では「平和で民主的な国家及び社会の形成者」となっている。地方自治体が出す計画としては、「平和で民主的な社会の形成者の育成」の方がよいと考えた。「等」と「など」については、行政文書では使いがちである。「等」と「など」は、感覚的に使っているところがある。改めて見直したいと考える。 「です、ます調」「である調」の使い分けについてであるが、現計画については「である調」にしている。第 3 期計画は「です、ます調」を基本に作成している。 「です、ます調」の箇所は、第 1 章、計画の策定にあたって、第 2 章、教育をめぐる現状と課題のうち、1、時代の潮流と教育、第 3 章、姫路の教育の目指す姿、第 5 章、計画の推進の箇所としており、その他は「である調」としている。「です、ます調」は、より多くの人に読んでもらいたいとの思いから、優しい語り口調を意識したものである。フォントについては、UDフォント、ユニバーサル・デザインフォントを使用するように意識した。障害の有無に関わらず読みやすい、目に入りやすいものを意識して使用している。「である調」は成果や課題、取り組み内容等であり、中身を端的に表したい箇所については「である調」としている。混在しているが意識して使い分けている。
委員	文言削除の理由が分かった。関連して 29 頁、「我が国の伝統や文化を深く理解した上で、世界の多様な文化の中で」とあるが、施策等を見ると「文化」については、「『地域の伝統や文化』を深く理解した上で『国内外の多様な文化』」としてもよいかと考える。
事務局	こどもアンケートの設問にもあるように地域の文化について学ぶことを学校教育の中で望むかどうかという設問がある。「我が国」とした表現も良いかと思うが、グローバル社会の中で、どのように生きていくかを意識した表現として、例えば「我が国や地域の伝統文化」といった文言とする等、改めて検討していきたい。

委員	28 頁「疾病や障害の有無、性別、年齢、文化的背景等」について、29 頁の 2 段落目の上から 3 行目に似た表現がある。一部表記があつたり、なかったりする箇所について表記がそろっていないのは、何か意図があるのか。意図がないのであれば、そろえたほうがよいのではないか。
事務局	第 2 回審議会でも、指摘頂いた箇所については表記をそろえた方がよいのではないかといった意見を頂いた。そろえようとも考えたが全く同じような表現が続くのも読みにくいとも考えた。基本的な考え方としては 28 頁に概略を記載、29 頁に 28 頁を補足する文言を付け加えたいと考えた。そうすると、疾病や障害の箇所についても、同じ言葉を繰り返すのか、繰り返さないのか検討し、同じような言葉を記載しない方が読みやすいのではないかと考え削除した。文化的背景等の「等」の箇所に 29 頁の文化的・言語的という文言が含まれている。表記を変えることで違いを出している。
委員	29 頁、下から 3 行目、「学校園・家庭・地域等において、」の「、」は削除してもつながるかと思う。
事務局	「、」がなくても意味は通じるが、ブレスの意味合いもある。読みやすさを重視した「、」でもある。
委員	28 頁「それにより」で始まる箇所について、姫路で暮らす人、姫路で学び、働く人等の「等」は、暮らす人、学ぶ人、働く人以外にも考えられるということだと思うが、そのような人はいるのか。「等」を付ける必要がなければ「暮らす、学ぶ、働くすべての人」と記載してもよい。
事務局	暮らす、学ぶ、働く人、以外というのは考えにくい。事務局内で検討したい。
委員	28 頁の真ん中「あるべき社会」の箇所であるが「あるべき」となると、何か正解があるように感じる。例えば「ありたい社会」といった文言でもよいのではないかとも思う。検討頂きたい。

事務局	「ありたい」もしくは「あるべき」なのか考えたいが、「べき」といっても人によって正解が異なる。みんなで一緒に考えるという意味合いで考えると、理想論的に「あるべき」としてもよいかと考えている。「あるべき」の方が文言としては、よいのではないかと思う。
会長	28 頁の下から 2 段目の段落「それにより」で始まる箇所であるが、姫路で暮らす人、姫路で学び、働く人等の「等」に違和感がある。検討されたい。 続いて、第 4 章と第 5 章の説明をお願いします。
事務局	【第 4 章、第 5 章】を説明
会長	意見が出ないようなので後で振り返ることとする。資料編について説明をお願いします。
事務局	【資料編】を説明
会長	資料編に限らず、全体を通じて意見はないか。 意見がないようなので、教育振興基本計画もしくは、今後の姫路市の教育に関して意見を聞きたい。
委員	私の子どもが高校生と中学生である。子どもが特別支援学級に所属している。PTA の役員も 10 年程している。様々な方面から様々なことを見ようと努力してきた。特別支援学級に子ども通わせる保護者は、知識がなく情報が少ない中で模索しながら就学を迎える保護者も多い。保護者に対して丁寧な説明、整備をお願いしたい。保護者同士のコミュニケーションも大切となる。特別支援学級に入級させるのか、もしくは特別支援学校に就学させるのかと迷う保護者が多く判断が難しい。保護者にとっての判断する基準が見えてこないなので、経験された保護者、知識のある保護者とのコミュニケーションの中から判断基準が見えてくるものもある。保護者の中にはコミュニケーションを図ることが苦手な方もいる。コミュニケーションが図れない場合は、なんとなく支援学校に就学させたり支援学級に入級させたりする保護者もいる。一番恩恵を受けなけ

	ればならない子どもが、支援のタイミングを失ったり、学校によっては体制が整って なかつたりすることがあるので、整備体制に関する内容が計画に記載されるとよいか と思う。公立学校では、幼稚園は子どもが少なくなっている。入園してくる子どもが1 人、2人の幼稚園もあり、1人、2人だと行事もやりにくい。地域交流もされてはいる が、保護者同士、子ども同士の関わりが少なくなってしまうので、何か手立てをとるこ とはできないかと考えている。P T Aの役員をしていると学校に行く機会が多い。先生 方とも話す機会が多い。先生の仕事は大変である。親として自身の子どもを育てながら 生活されている先生もいる中で、勝手なもので保護者は自分の子どもを十分に見てほ しいと言う。先生方も生活の中で大変な苦労があるにも関わらず、他人の子どもの面倒 を見ながら保護者の意見を聞く等、大変な仕事をしている印象がある。先生方の働き方 改革を進め、負担を軽減する必要がある。行政が理解を深めていく必要もある。そうす ることで、子どもに対してよりよい環境を提供できるのではないかと、問題となることも ないのではないかと考える。現場に即したヒアリングをしていく必要があると思う。支 援員の方にも意見を聞き計画等に反映してほしい。
委員	質問でもよいか。33 頁の注 19 について、P D C A サイクルの A は A c t か A c t i o n か。59 頁の P D C A サイクルの A は A c t i o n、イメージ図も A c t i o n に なっている。A c t と A c t i o n の違いは何か。
事務局	表記のズレがある。A c t i o n で統一したい。
委員	77 頁の施策 5－3 伝統文化・歴史的文書の継承と活用の指標項目について聞きたい。 「古文書、歴史的資料の公開件数」であるが、令和 5 年度までは右肩上がりである。目 標値は令和 5 年度の半分程度となっている。理由は何か。
事務局	令和 5 年度は姫路城の世界文化遺産 30 周年記念事業があった。城郭研究室、城内図 書館で古文書、歴史的資料の閲覧が非常に増えた。それを考慮して目標値の数値を設定 しており、数値が下がったというよりは平均的な数値設定としている。
委員	数値は、新規の公開件数ということか。

事務局	閲覧の件数である。
委員	公開件数の文言を「利用件数」といった表記にした方が誤解を生まないのではないかと思う。
事務局	表記については検討したい。
委員	全体のバランスを見ると、学校教育と社会教育に分かれており学校教育が多くの比重を占めている。社会教育は姫路市では社会教育施設を市長部局に移管している。計画の中では、あまり出てこないが、総合教育会議等で市長部局と教育委員会が連携し、市長部局の社会教育施設の取組も進めてほしい。
委員	市長部局としてもこれまで以上に積極的に推進していきたいと考えている。 学校教育、社会教育ともにこれまで以上に一層連携して取り組んでいきたい。 行政だけではなく、地域の人や民間企業とともに一層連携していく必要があると考えている。今後も姫路の教育をより良いものにしていきたい。
委員	姫路市には中学校が 36 校、大規模校から小規模校まである。利便性がよく交通手段が整っており、高校までの通学手段がある地域、どのようにして高校に通学しようかと悩んでしまうような地域、加えて離島もある。そのような観点から、姫路市のどこで生まれ育っても、自分の可能性に挑戦できるような進路保障をしたいと考えている。保護者の経済的な負担も大きく、バスを利用しないと通学できないといったことが起こっており、進路が狭まってきているのではないかと思う。勤務先の校区にある高校も発展的に統合される。地域の方々も取り残されているのではないかとされている人もいる。スクールバス等、いろいろな手立てを考えてほしい。大規模校では大規模校なりの課題があり人的支援等をお願いしたいところである。 I C Tを活用した学び方、自分らしく主体的に学び続けられる子どもを育成するというのは本当に難しいことであり中学校においても課題である。子どもたちが受け身となっている授業も多々見られる。先生、保護者、子どもたちの意識改革を進め、自分

委員	で学ぶという意識を持たせるようにしたい。学校単独で改革を進めていくのは難しいところもある。今後も教育委員会、関係機関と協力しながら、子どもたちが学び続ける、主体的に学ぶということを推し進めていきたい。
	中学校で起こっていた「荒れ」の状況が段々と小学校の方で起こっている。様々な背景を持った子どもが、満たされない気持ちを学校の中で発散させている。子どもが抱えている背景について学校側は理解できているので受け入れたいが、他の子どもたちの学力も保障しなければならない。不登校児童生徒支援員であったり、学級運営の改善を行う学びのサポート担当教員だったりを配置していただいているが、予算が付いても人がいないという現状である。人不足は明らかだが、何とかいろいろな子どもを受け入れて、少しでも成長した姿で中学校へ送り出してやりたいと考えている。業務改善、ICT等の支援もありがたいが、まず人的な支援をお願いしたい。子どもが求めているものは、人の温かみ、ぬくもりを求めている。そのところをどのように埋めていくのか、若い先生方も解決方法を求めている。困ったときに相談できる相談先を教育委員会に教えてもらったときは安心した。
副会長	26 頁のこどもアンケートの概要については抜粋というかたちで掲載されているが、こどもアンケートを教育委員会としてどのように分析、考察したのかということが冒頭に、数行記載してもよいのではないかと考える。 指標について聞きたい。すべての事業について指標が設定されているのか、指標のない事業があるのか。指標のない場合は、どのようにして評価するのか。冊子となる場合は、フォントサイズの統一をするとともに、写真等が入るとよいかと考える。 審議会については多面的、多角的で様々な立場から意見を述べて頂いた。形式的な議論ではなく、深みのある議論であったと思う。
事務局	こどもアンケートについての冒頭文は、検討したが、基本的には事実だけを掲載している。他都市の教育振興基本計画も参考としているが、参考としたものを見る限りアンケートをとり、その結果を掲載しているが分析ではなく、事実だけを掲載している。結果をどのように捉えるのかは難しい。事務局内で細かい分析を進めている。分析については教育委員会内部で共有し、校園長会等でフィードバックしていきたいと考えている。指標については、毎年実施している「教育に関する事務の管理及び執行の状況の点

	検及び評価」の中で教育振興基本計画に掲載している指標、それ以外にも指標を設定している。第2期計画から指標については設定しており、第3期計画においても同様に行いたいと考えている。フォント等については、冊子の印刷を委託する際に、見やすいようデザインしてもらう。現状の素案よりも見やすいものになる予定である。写真は今のところ掲載予定はなく、概要版にはイラストの掲載を予定している。
委員	人を育てるのは人であってほしい。人の温かさが分かる教育をしていってほしい。学校の先生の困りごと、弁護士の方を紹介された事例があった。そのような方法を伝えることができるのも人が要になってくる。保護者の間でも経済的やいろいろな背景で生活されている方が多い。そのような方への想像力を膨らませられるような手立てができるとうい。 前回、レジリエンスという言葉が審議会の中で議論されたが、倒れ掛かっている人に、どうやったら回復を促すことができるのか保護者も学習が必要である。先生方への配慮も必要になる。関わり方の手だての一つにPTAがある。なくてもよいかもしれないが、ないと困るのがPTAや自治会である。そういう人たちにも手助けがあれば、より住みやすい姫路になると思う。姫路に対する愛着を育てるために大人にも支援が必要である。
委員	現場からの視点で話をしたい。高校教師を43年間務めた。昭和の時代に行っていた部活動の指導方法で必死になって指導していた。その結果、日本代表等を輩出してきた。今はそのような時代ではない。良いタイミングで部活動の地域移行がされようとしている。何か一緒に仕事ができたらと考えている。高校で43年間教師をしながら地域でクラブチーム、NPOを立ち上げ活動してきた。幼児、小学生、中学生と育ててきた子どもたちが社会人となった。そのような子どもたちを見ながら50年となる。その間、部活動に対して違和感を持ちながらも、勝利第一主義ではないと気付いたのは最近である。 また市立3高校がどのようになるのかが気になる。姫路高校、琴丘高校に合計26年間勤務した。今後どのようになるのかが気になる場所である。 70歳を過ぎてからもいろいろな活動をしている。不登校の子どもは母親と過ごす時間が増える。現在は、週末になると4歳、5歳の子どもにサッカーを指導しながら放課後等デイサービスへも行っている。共生の時代に入っている。

	姫路市が大好きなので、姫路市に民間のサッカー場を作った。そこを共生の場にして いる。発達障害、知的障害を持つ子どもたちのサッカーチームをつくり、工夫をしながら 健常者と一緒にサッカーができるようにしている。携われることは一緒にしていき たいと考えている。
委員	高校については、次期学習指導要領に向けて、中央教育審議会の委員が様々なところ で改訂の方向性について説明している。鍵となるのは探究を柱とした新しいカリキュ ラムづくりである。授業時間の弾力化がさらに進み、各学校においては、校長のリーダ ーシップ、ミドルリーダーのリーダーシップの発揮が求められる。社会にあてはめ ると、仕事そのものである。人が生活する上で仕事、探究は必要である。生徒の前では、 哲学の話を分かりやすいように話している。高校においては、基礎基本を徹底的に学ば せ、探究をさせていかないといけない。それぞれの職業や生き方を再現していかないと いけないと考えている。
委員	幼児教育に携わっているので、いろいろな方面から審議されている計画の策定に関 わり、自分自身の視野が広がったと感じている。練りに練った計画が職員、先生方に読 んでもらえるようにしていきたい。日々の保育、教育に追われ、読む時間が取れていな いが、基本的なものを読み、振り返ることが必要だと思う。ペーパーレスの時代ではあ るが、冊子として手元にあればありがたい。データではなく学校や幼稚園に何冊か冊子 を置き、いつでも手に取れるようにしてほしい。 5年間の計画ではあるが、公立幼稚園は3年後には現状の半分以下になる厳しい時 代に入ってきている。園数は減るが教育をしっかりと守る公立幼稚園でありたい。
委員	私が一番、学校教育においてお願いしたいのは、学校施設は、子どもたちにとって最 善の教育環境の場であってほしい。これまでも自治会長としてお願いしてきた。 小学校では大規模改修及び体育館の建て替え工事をしている。中学校では体育館の 改修工事をしている。また、少年とのかかわり合いは40年程、防犯の関係で行ってい る。少年補導員もしている。教育は教えることだけではないと思っている。人間と人間 のつながりを大切にした教育を小学校の先生方には是非ともお願いしたい。それが、子 どもの一生を左右すると考えている。人と人との繋がりを大切にした教育をお願いし たい。

委員	働き甲斐のある学校園づくりという項目があった。他の業種と比べると、学校現場で働く者は、精神疾患、メンタル的な部分が病んでしまったり、途中で休んでしまったりするような人が増えてきている。原因は、子どもの対応、保護者との対応等がうまくいかない場合である。学校現場で働こうとしている人は、子どもの目を輝かせたいと考えて働いている者が多い。働きやすい環境整備をしていきたいと思う。また、保護者対応で時間をとられることが多い。保護者も姫路で育ってきた可能性があり、目の前の子どもたちも将来は保護者になる可能性がある。つながりという視点からも教育は大切である。 保護者会等の日時設定で、教職員の勤務時間外の日時を要望する保護者もいる。企業側も子どもを育てやすいように学校の職員の勤務時間内に学校に行けるよう環境づくりをしてほしい。学校が合わせるのではなく、社会が子どもを中心に、育てられる環境を作っていかなければいけない。
会長	貴重なご意見を賜った。 本日の素案に対しては、特に大きな変更ないと思う。文言等の修正箇所は事務局と私、副会長の間で後日責任をもって確認する。審議会は本日をもって最終としたい。 私の方からも感想を述べたい。5年間の計画ということが決まっております。仕方はないが変化の大きい時代に5年間の計画は長いように思う。5年間でPDCAのサイクルで実行し検証する。現状は、3年4年経てば、異なる状況になっている。特に学校教育でいえばDX、ICTが進む。そしてインクルーシブ教育、少子化への対応である。想定外のことも起こる。次の計画からは、おそらく5年間ではなくなっているのではないかと思います。アジャイル型、実行しながら計画を変えていくようなことになるのではないかと。変化を見据え、柔軟に対応していただきたい。姫路の教育がさらに良くなることを願っている。
教育長	皆様から意見を頂き、大きくは素案に対しての変更点はないと受けとめた。事務局内での議論を重ねての素案であり、良いものができているという確信ができた。計画は、あくまでも方向性を示したものであり、その都度、状況に応じて変化を恐れず実行することが大切である。引き続き完成までご意見を頂ければ幸いです。

事務局	4 連絡事項 今後は、本日提案した素案を修正し、修正したものを会長、副会長に確認していただき、答申を行いたいと考えている。審議会は本日をもって終了とし、答申の授受は、10月28日に会長、副会長と事務局で行う。今後の予定としては、答申後、教育委員会として計画案を策定し、12月から1月にかけての約1か月間、パブリック・コメントを募集する。パブリック・コメントの手続きを経て、今年度内に計画を策定する。本日の会議録について、近日中に会議録案を作成する。内容の確認をお願いしたい。
事務局	5 閉 会 以上で姫路市教育振興基本計画審議会を閉会とする。